

## プロテスタント合衆国に学ぶ

立田 由紀恵

神学という言葉にはアレルギーがある、と公言している。

神学を研究されている方々が気を悪くされたらば申し訳ない。しかし誤解しないでいただきたいが、神学という研究分野そのものにも研究者にも非常に敬意を払っている。専門であるイスラームについては、その神学の基礎を学ぶのは当然のことと前向きに取り組んでいる。

ただ個人的に、神学という言葉に過度な拒絶反応を示してしまうのだ。本であれ論文であれ、授業案内や学会発表の案内でも、「神学 theology」という言葉が入っているだけで極端に避けてしまう。

おそらく理由は簡単で明白だ。3年半前、合衆国の宗教学専攻博士課程で学び始めてから、キリスト教神学を学ぶことを当然とされる環境に反抗し続けてきたからだろう。

先頃私は専門を変えた。

宗教学専攻に変わりはないが、その中での専門を「宗教と社会」からイスラームに変えたのだ。

「宗教と社会」は学科内学科とも呼べるような組織であり、専属教官と学生による年2回のミーティングや所属学生必修の授業などもある、密度の比較的濃い共同体であった。その共同体から出るというのはあまり気楽にできることではない。

そこを出ようと決心をした直接のきっかけは、博士論文を書く前に受けねばならない試験である。4つの試験のうち1つは自分の専門分野のものであり、私の場合は「宗教と社会」共通のものとなる筈だった。試験を受ける半年ほど前に、その試験準備に読む文献リストを提出するのだが、「宗教と社会」試験の文献にキリスト教神学のテキストを入れることを要求されたのだ。

他の部分の訂正は受け入れた。政治や文化面の

文献が足りないと言われればそれを追加し、通常の倍程もあるような大きなリストとなっても文句は言わなかった。しかし、キリスト教神学のテキストを含めることはどうしても認められなかった。

指導教官のデイビッド・リトル教授は、私が「宗教と社会」を出ようと考えていると話すと、そのような「過激な」打開策をなんとか避けさせようと、以前紛争地域の平和交渉などに携わった経験からなんとか妥協点を見つけようと苦心して下さった。

向こうは文献リストにあなたの読みたい本を入れることをここまで認めている。そうしたらあなたはこの1冊を妥協することはできるかい？

私の答えはきっぱりしていた。妥協はしません、キリスト教神学を勉強することを強制されることはできません。私が神学という言葉にアレルギーを持つまでに至るには理由があるんです。

宗教学専攻博士課程では1年次と2年次に必修のゼミがある。1年次のゼミは宗教学の主要な研究者について、2年次は儀礼、信仰といった主要テーマについての授業である。

1年目、その必修ゼミの後私は毎回同級生の台湾人学生と話をしていた。話というより、涙ながらに彼に愚痴をこぼしていた。内容は毎回同じである。なぜこの授業は西洋キリスト教のことしか扱わないのか、なぜ東アジアの宗教は「原始的宗教」として相手にもされないのか、ということだ。

私の同期は私も含め8人いた。米国人3人、英国人2人、東・東南アジア人3人。米英国人5人のうち4人はキリスト教研究が専門だった。必修の授業担当はキリスト教とイスラームの神学専門の教授が1人ずつだが、イスラームの教授も自身はキリスト教徒であり、議論的は自然とキリス

ト教、特にプロテスタントで焦点となる信仰面に集まる。

日本の、特に宗教とは縁もない家庭に生まれ育った私にとって、この信仰というものは自分から遠い存在である。しかし私は自分が宗教を持たない存在だとは思わない。宗教というのは私にとってもっと自然な、おそらく文化そのものの中に溶け込んでしまっている、普段は意識すらしないような、それでいて時折例えば神社にお参りする時など微かに感覚の中に呼び覚まされるような、そんな漠然としたものである。

授業で読む本の中、そのような宗教感覚を扱うものはなかった。なのでゼミでの私の発言といえ、この筆者は西洋キリスト教のことしか話していない、東アジアの宗教にはあてはまらない、とそればかり。教授も他の学生たちも次第に相手にしなくなっていったのも無理はないかもしれない。

しかしそのぐらいのことは言っている本人にも分かっていた。分かっている、読む本に何の共感もできない以上それしか言えないのだ。分かっている、それを相手にしない教授や学生に西洋キリスト教中心の姿勢を見て悔しかった。

その必修の授業に、東・東南アジア人は同期の3人とその台湾人学生を加え4人いた。私の不満はこの4人の間で共通のものだった。私が誰よりも声高に不満を訴えると、勇気があると他の学生たちに応援された。

同期アジア人3人のうち、1人は学期半ばにして宗教学を去った。残り1人も翌年度には東アジア研究に移った。気持ちは分かる。あまりに居心地が悪いのだ。東・東南アジア人がその地域の宗教を研究しようと思っても、ここの宗教学科の中では完全に異端となり、学科共通の知識枠に参加することができないからだ。

毎週の授業後、台湾人学生と話しながら、自らの立場の弱さをいつも自覚した。こちらには替りに提供する理論枠組みがないのだ。西欧キリスト教を説明するだけの理論に文句を言ってみても、では東アジアの宗教を説明する理論はあるだろうか。私と彼の勉強不足かもしれないが、私たちには思いつかなかった。そんな偏った本ばかり読んでいないでこの本もゼミで読もう、と提案できる

ような作品は思いつかなかった。そのことがマイノリティの悔しさを更に倍増させた。

悔し紛れに期末ペーパーでは、信仰という要素がいかに宗教の中心ではないかという議論を乱暴に繰り広げた。学科を去った学生にそのことを話すと熱烈な賞賛の言葉が返ってきた。

その学期末、同級生宅でクリスマスパーティーがあった。そこで、英米人学生の中で唯一キリスト教が専門でない一人がこう言ったのがひどくショックだった。「神学を勉強する人は宗教学を学ばなくてもいいと思うけれど、宗教学の学生は基礎として神学を勉強しないとイケないと思う。」逆ではないか、と耳を疑った。キリスト教プロテスタントの土壌で育った彼女にとって、宗教の本質は信仰であり宗教学の基礎は神学であるというのは自明だったのだろうが、その不文の自明な了解をそこまでまっすぐ言葉にされたのは初めてだった。さんざん私が授業で騒いだことも彼女には届いていなかった、それはまた決して彼女一人ではないだろう、ということが更にショックに輪をかけた。

2年次の必修授業はひどかった。宗教学の主なテーマ、と言いながら、蓋を開ければ担当教官の専門である初期キリスト教や古代中米の儀礼を勉強させられたのだ。それらに基づいて儀礼一般についての議論を繰り広げるのかと学生一同待っていたが、その期待はあっさり裏切られた。

話が違う、と博士課程プログラム長教授に直訴した。予定の授業内容と違っているのだから私に分があるはずと思えば、教授は完全に担当教官の肩を持つ。「初期キリスト教を勉強することも自分のために必用だとは思わないかい？」

「いえ思いません」とはっきり言い放つも、日本人でもキリスト教を学ぶのは当然、というような、そんな言葉で丸め込もうとされたことに対する悔しさは鋭く突き刺さった。

日本人だと言うと、日本の宗教を勉強しているのかとよく聞かれる。実際宗教学科の中国人の大半は中国の宗教を勉強しているし、もう一人の日本人学生は日本の宗教が専門だ。しかしその先入観を私は侮辱と受け止める。あなたたちはあなた

たちで勝手におやり、口は出さないから、とアジア研究アジア人たちは囲いの外に締め出されているように感じる。アジア人本人たちも、時折西洋キリスト教及びそれに基づいた宗教理論を勉強せねばならなくなる不便を忍びつつ、それさえ乗り越えれば自分たちの世界で研究を繰り広げられるのでさほど困ってもいないようである。

西洋で発達した宗教理論が西洋の宗教状況に対応しているのは当然だ。私はイスラームとそのキリスト教との関係が専門なため、自分の研究に際しては何の問題もなくそれら理論に頼っている。また、それらの西洋状況に主に則した理論が日本の状況とまったく合わないと思えることもない。ただ、自分の宗教性が「例外」としてまともに扱われないことに対する屈辱感と、更にその例外が例外ではないと主張できるほどの研究成果が、その「例外」社会内部の人間によってすらなされていないように見えることへの悔しさが、私の中でしばしば爆発しているように思う。そして西洋中心の宗教学研究世界におけるマイノリティとしての不満が積み重なる中、私にとって神学はその西洋中心の象徴となり、アレルギーを起こす元となってしまったのだろう。

同じような状況は日本でもあったように思う。しかし日本人同士の中では、宗教についての議論で日本宗教のことが直接扱われていなくても、自分自身の宗教を除外されたと感じることはなかつ

た。西洋社会でそのようなことが起き、自分の宗教背景を除外され軽くあしらわれていると感じたからこそ、そのことが屈辱感を伴い鋭く感じられたのだろうと思う。

なのでこの状況には感謝している。そうでなければ、日本の宗教を説明できるような理論を構築する必要性をここまで切迫して感じることはなかったろうからだ。

私の専門は日本研究ではない。しかし私が内側から感じることでできる宗教とは日本のものでしかあり得ない。専門としてアフリカ系アメリカ人、ボスニア人、そしてパレスチナ人と、日本とは全く違う状況の宗教を調査研究しながら、それと照らし合わせて日本の宗教をよりよく理解することができるのではないか、と期待し、いつかはその日本の宗教性を含めた、私の感じ理解する宗教というものを他の宗教研究者たちと共に理論化したという大いなる野望を抱くようになったのは、この積み重ねられた悔しさのおかげだろう。小さく大きく噴出させながらも、この不満は確実に将来に向けその実を徐々に膨らませつつあるような気がする。

それが実を膨らませることができるのは、そんな反抗を肯定的に受け止める指導教官リトル教授のおかげだろう。最後に感謝の意を表させていたきたい。